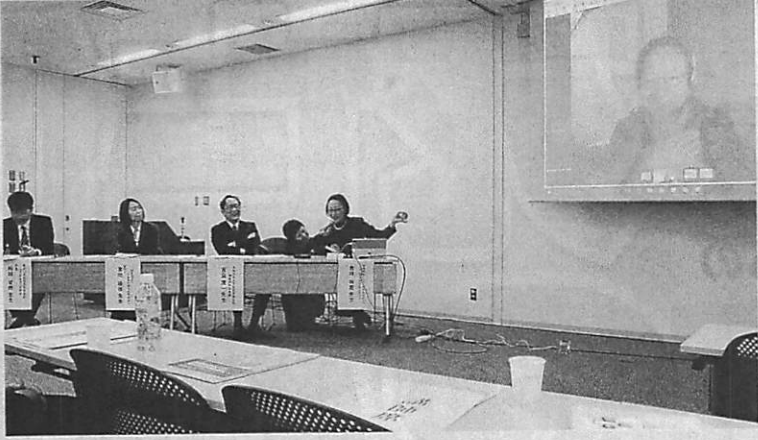


難病患者の就労後押し

難病患者の働き方を考えるフォーラム（県難病相談・支援センター主催）が福岡市で開かれ、就労支援の関係者らが参加した。パソコンなどの情報通信技術を使い、時間や場所を有効活用する働き方「テレワーク」について、在宅勤務中の人らと会場をインターネットでつなぎ、利点や注意点などを話し合った。

テレワークで仮想オフィス

「在宅勤務でも、いつでも（同僚と）話しかけられるツール（手段）があるんですよ」18日、博多区の会議室。テレワークを推進する企業「テレワークマネジメント」の倉持利恵さん(47)がそう話し、スクリーンに映し出された仮想オフィスの寺田郷子さん(51)の机をクリックした。「コンコン」とノック音がすると、すぐに在宅勤務中の寺田さんの映像が映し出された。「こんにちは。こちらは北海道石狩郡当別町です。外は大雪です。それでも仕事ができます」



④北海道当別町の自宅でテレワーク中の寺田郷子さん(右)の様子がスクリーンに映し出された。福岡市博多区下から見た仮想オフィス。机をクリックすると、ノック音がして、すぐに遠方で仕事する人の映像が映し出された。



テレ（離れた所ワーク）働くは、会社に通勤しなくても自宅やサテライトオフィスなどで仕事をする働き方。国が進める働き方改革の一つで、子育てや介護中などでも働きやすい仕組みだ。通勤やオフィスでの勤務が体の負担になりやすい難病患者の就労の後押しも期待されている。

フォーラムで登壇した新宮町の宮地勝枝さん(49)は難病の多発性硬化症を患い、疲れやすく下半身にまひや排泄障害などがある。現在は自宅でインターネット通販業務をしている。インターネット上の共用ファイルを使い、通勤する同僚と同じ業務をこなし、体調に合わせて働く時間を調整しているという。「感染症にかかりやすいが、人混みを避けられる。通勤がないので体調が安定しやすく、トイレが近くにあるので安心して働けます」

倉持さんは、テレワーク導入の際に大事な点として、①全体の仕事から自宅でできる仕事を一部切り取るのになく、会社でやる仕事を自宅でどうやられるか、業務改善とセ



友谷由紀子さん

負担減り週5日働く

難病患者は症状が変動しやすいが、職場の配慮があれば働ける人が多い。通勤から在宅ワークに変えることで、毎日働けるようになった患者もいる。

福岡市の友谷由紀子さん(47)は2006年に車にはねられ、難病の「線維筋痛症」など四つの病気を患い、全国の病院に通っている。医療助成対象の指定難病ではなく、夫の同行も必要のため、1回に交通費や検査代など30万円ほどかかるという。

事故当時、契約社員だった「病気で休むと困る」と言われ、会社に迷惑をかけると思って契約を更新できなかつた。夫の収入だけでは治療費を払えず、借金を繰り返して

難病患者の仲間との出会いもあって立ち直り、3年前から、障害者向けの就労移行支援事業所でテーパー起しなどの仕事を始めた。全身の痛みや疲労感などがあるため、片道1時間の通勤がきつく、在宅ワークが認められた。労働時間を記録でき、人の場所を感知する「人感センサー」を活用する「在宅就労管理システム」をスマートフォンに入れて作業をしている。

通勤では週2回ほどしか働けなかったが、在宅ワークでは人目を気にせず休憩がとれ、作業効率上がり、週5日で働けるようになったという。「通勤がない分、体への負担が減った。仕事を通じて社会とのつながりが持てるようになり、自分が必要とされているという自信になった」

ットで考えること②同僚と密なコミュニケーションをとること③働く時間の管理をすること④を挙げた。自宅などで働く人はサボっていると思われたくないため、長時間労働しがちだという。

倉持さんは「労働人口が減る中、テレワークにより、今まで働きたくても働けない人が働けることができ、人材確保ができることがメリット」と話した。

参加した障害者向けの就職支援・就労支援事業所「CH ANGE&スマイルカンパニー」の鈴木広直さん(52)は「在宅なら働ける人が多く、（雇用主との）マッチングの課題だったので、テレワークを積極的に導入したいと思う」と話した。

(伊藤麻利)